

食品アクセスセミナー第3回報告要旨（平成22年9月2日）

「都市社会における〈つながり〉の位相とフードデザート」

明治学院大学教授

浅川達人

農林水産政策研究所では、高齢者の増加や食料品小売店・飲食点数の減少等に伴い、食料品にアクセスするのが困難な者の顕在化が問題になってきていることを踏まえ、食料品へのアクセスに関するセミナーを開催しています。今回はその3回目として、浅川客員研究員（明治学院大学教授）からご講演をいただきました。

【講演概要】

講演では、以下の4点について報告が行われました。

- 1．東京大都市圏で起こった郊外化と再都市化
- 2．郊外化と再都市化の地理的な違い
- 3．社会構造・空間構造の変化の中での人と人とのつながりの変化
- 4．人と人とのつながりの変化とフードデザート問題

1．について、東京都への転入・転出者数の分析から、高度経済成長期からバブル経済期にかけて進んだ郊外化とその後に見られた再都市化について話されました。郊外化の時期には東京都への転入者数と同じだけの転出者がいたものが、再都市化の時期に入ると20～40代を中心に、東京都の中で生活する場の確保が容易になったため、転出者が少なくなったとありました。

2．の中で、団塊の世代の1970年から1990年の動きをみることで、郊外化の説明がなされました。1970年代の東京では、城東・城南地域には工場や問屋が密集しており、この中では住居を求めることが容易でなかったため、郊外にそれを求めたこと、その後、1990年代までに地価の安い地方に移転が進み、跡地が住宅地になることで再都市化が進んだという説明がありました。

3．について、人間の多い都市では、その多くの人間達と親密な関係を築いていくことが難しいため、目的合理的になり、孤独になるというワースの論や、経済的貧困のせいで社会的解体が起こるというガンズの論など、既存研究が紹介されました。

その後、浅川客員研究員から、地域特性を踏まえつつ、その地域ではどのようなつながりが重要かを考えるべきとの発言がありました。

4．について、人と人とのつながりの変化の一つの側面がフードデザート問題であるという説明があり、このことについて東京都の向島などいくつかの地域の特徴について説明がありました。

フードデザート問題とは、生鮮食料品に対して、心理的、社会的な距離のある人たちがいる地域に集まることで顕在化した問題であり、それを解決するためには、様々な対策の中から地域特性を踏まえた対策を行うことが必要であるとの提言がありました。

（文責：高岸陽一郎）